

2002年度

NGO-JICA相互研参

プロジェクト案件形成

～プロジェクトは誰のため、何のため～

報告書

JICA LIBRARY



1172889[6]

主催

国際協力事業団



特定非営利活動法人

国際協力NGOセンター



総 研

J R

02-69

報告書の発刊にあたって

平成14年10月17日から19日にわたり、(特活)国際協力NGOセンター(JANIC)と国際協力事業団(JICA)は共同で「NGO-JICA 相互研修」を開催しました。この研修は、NGO 諸団体と ODA、なかでも JICA との連携への気運が高まりつつあった平成10年度から開始され、今年で5回目の開催となりました。

この5年間は、当事業団が NGO 諸団体との協力の推進に向けて様々な組織・制度改変を行った期間でもあります。平成12年度には国内の NGO との連携事業を担当する部署(国内事業部連携促進課)を創設し、今年度からは国民参加協力推進費が認可され、NGO や市民が主導権を持って実施する国際協力を支援する草の根技術協力事業を発足させることができました。そうした連携促進に向けた取組みのなかで、国際協力を行うパートナーとしての NGO と JICA 双方の理解促進と、人的ネットワーク構築を目指す本研修の果たす意義は大きいと考えております。

昨年の NGO-JICA 相互研修では「評価」を研修テーマとし、NGO、JICA 共に利用可能な「望ましい評価ガイドライン」の作成を行いました。その中で、プロジェクトの案件形成段階の重要性が再認識されたことを受け、今年度は「プロジェクト案件形成」をテーマといたしました。NGO と JICA との案件形成プロセスの違いは、漠然とは認識されているものの、双方のスタッフが集まっての議論を通じて、その違いが明確に認識される機会は少ないのではないのでしょうか。この研修を通じて、両者の相違点を明確にし、双方の長所・短所を比較して、NGO、JICA それぞれの望ましい案件形成のあり方をアクションプランとしてまとめることができたことは大きな成果であり、今後の NGO と JICA の連携に向けた大きな前進であったと思います。この研修を通じて培われた人的ネットワークが、将来に渡って参加者の皆様の財産となることを願うとともに、本報告書が「NGO と JICA との連携」、あるいは「プロジェクト案件形成」に関心をお持ちの方の一助になることを願っております。

最後に、研修の開催にあたってご協いただいた(特活)国際協力NGOセンター、半年に渡り実施準備にご尽力頂いたコースリーダーの女子栄養大学磯田厚子助教授及び検討委員の方々、研修当日の事例報告や講演等にご協力頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

国際協力事業団
国際協力総合研修所
所長 加藤圭一



1172889【6】

ごあいさつ

第5回になる今回の研修テーマは、「プロジェクト案件形成～プロジェクトは誰のため、何のため～」でした。国際協力を行うにあたり、根幹を成すテーマであり、ある意味では、本研修プログラムが始まった最初の年度あるいはその後数年内に取り上げるべきだったようにも思えました。と同時に、このテーマは、国際協力に携わる組織そして職員・ボランティアたちにとっては、今後も常に問いかけ続けなければならないと考えます。

このテーマの下、政府の援助実施機関である国際協力事業団（JICA）と、市民の国際協力組織、いわゆる NGO の職員・ボランティアが、2002年10月17日から19日にわたり、横浜の JICA センターで合宿形式により、「プロジェクト案件形成」について事例報告を出し合いながら、真剣に討議しました。2日間にわたる討議から得られたものは、予想を超えた結果でした。第1に、案件形成が、両者の組織の性格そして置かれた立場から、異なることを確認し、理解を深めたことでした。これは、当然といえば当然ですが、JICA と NGO がそれぞれ持つ強みと弱みを知り、今後の案件形成改善のためにより広い視野を持つ機会になり、互いに学び取ることができたことでした。第2に、JICA と NGO 受講生の間、信頼関係とそして一種の相互尊重の念が生まれたことでした。これは、合宿の間そして研修終了後の評価シートの中にも表現されました。第3に、本研修を共催した NGO 関係者として、JICA の若い受講生の人たちが高い問題意識を持ち、組織のあり方と事業実施プロセスの改善に強い意欲を持たれていることでした。これは、とても印象深く、NGO の受講生がむしろ圧倒されている感じでした。

その他多くの成果を挙げた研修であったことは、受講生の方たちの約8割が今回の研修を積極的に評価したことに表れていますが、要は、相互に学び合ったことをそれぞれの仲間たちと共有し、高めた問題意識を持続させて、具体的行動に結び付けていくかだと考えます。5年後、10年後に、今回の研修成果が活かされ、私たちの国際協力が、より効果性のある、そして相手国住民の自立自助と発展に結びついていることを願っています。

最後に、半年にわたり、研修準備を進めていただきました JICA と NGO 双方の検討委員会メンバーの方々、そして研修当日に事例報告や講演をいただいた方々に、心よりお礼申し上げます。また、準備期間中および研修当日の会場をご提供いただいた本研修共催のパートナーである国際協力事業団に対し、感謝申し上げます。

(特活)国際協力 NGO センター
常務理事 伊藤道雄

コースリーダー・検討委員・事例報告者・講師・事務局

コースリーダー

磯田 厚子 女子栄養大学／特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター 助教授／副代表

検討委員

青木 美由紀 特定非営利活動法人シェア＝国際保健協力
市民の会 東ティモール事業担当

検討委員

田中 博 特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会 事務局長

検討委員

チャンロン・インタヴァン ラオスの子どもに絵本を送る会 代表

検討委員

長畑 誠 特定非営利活動法人シャプラニール 評議員

検討委員

竹内 智子 JICA 国内事業部 国内連携促進課課長代理

検討委員

玉林 洋介 JICA アジア第一部 計画課課長代理

検討委員

上島 篤志 JICA 中南米部 計画課課長代理

検討委員

西本 玲 JICA 森林・自然環境部 水産環境協力課課長代理

事例報告書

清水 俊弘 特定非営利活動法人日本国際ボランティア
センター 事務局長

事例報告書

飯沼 光生 元インドネシア淡水養殖振興計画プロジェクト
専門家

講師

下沢 嶽 特定非営利活動法人シャプラニール 前事務局長

講師

鶴田 厚子 社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン スペシャルアドバイザー

講師

小川 正子 元エル・サルヴァルト看護教育強化
プロジェクトリーダー

講師

赤松 志朗 JICA 国際協力専門員

事務局

伊藤 道雄 特定非営利活動法人国際協力 NGO センター 常務理事

事務局

小林 哲也 特定非営利活動法人国際協力 NGO センター 正会員・提言活動担当

事務局

斉藤 祐巳 JICA 国際協力総合研修所 人材養成課長

事務局

大野 ゆかり JICA 国際協力総合研修所 人材養成課課長代理

事務局

田村 豪 JICA 国際協力総合研修所 人材養成課担当

IHCSA

大塚 洋子 社団法人国際交流サービス協会 派遣研修部長

IHCSA

磯 智明 社団法人国際交流サービス協会 派遣研修部課長

IHCSA

斉藤 大 社団法人国際交流サービス協会 派遣研修部担当

NGO-JICA 相互研修実施準備スケジュール

- 5月27日 第1回検討委員会（研修日程、会場、研修テーマ決定）
- 6月27日 第2回検討委員会（参加者資格要件決定、研修カリキュラム検討等）
- 7月8日 募集開始（募集要項配布、ホームページ掲載等）
- 7月22日 第3回検討委員会（パネルディスカッション・事例紹介の内容及び担当講師検討、NGO 事務所訪問先決定）
- 8月20日 募集締切
- 8月29日 第4回検討委員会（受講者決定、事例紹介内容検討）
- 9月12日 パネルディスカッション事前打ち合わせ（内容、進行方法の確認）
- 9月25日 第5回検討委員会
（事例紹介内容検討、参加者グループ分け、事前配布資料 検討）
- 10月17日～19日 研修実施

目 次

1. 研修総括

(1) 研修の成果について	1
(2) 研修概要	5
・研修構成概要	
・日 程	
・参加者リスト	
(3) 終了時アンケート結果	10

2. 研修内容

(1) 事務所相互訪問	23
・全体概要	
・NGO 事務所訪問概要 (JVC、シャプラニール、JANIC)	
・JICA 本部訪問概要	
(2) パネルディスカッション	29
プロジェクトは誰のため、何のため	
(3) 分科会	38
(4) 全体会Ⅰ	40
・分科会報告	
・報告時使用資料	
(5) 全体会Ⅱ	56
・概 要	
・発表時使用資料	

付 録

付録1 プロジェクト紹介資料

付録2 募集要項

1. 研修総括

研修の成果について

NGO-JICA 相互研修コースリーダー

女子栄養大学助教授・日本国際ボランティアセンター副代表 磯田厚子

1. 研修の目的と内容

5年目を迎えた2002年度の「NGO-JICA 相互研修」は、当初から目的の1つとしてきたNGOとJICAの「相対比較」「相互理解」を一層深めるとともに、昨年以来のいわば第2フェーズとでもいうべき、国際協力の具体的な方法論に関して、良い意味で批判的・建設的に議論を交わし、互いに一步高め合う提言を生み出すことを目的とした。

今年のテーマは、昨年大変好評だった「評価を考える」から立ちかえり、「案件発掘・形成はどうあるべきか」を考えるものであった。伏線として、「誰のための案件発掘・形成か」、つまり、プロジェクトはいったい誰のため、何のために行うのか、を根元に据えた発掘・形成でなければならないことを再度認識し、そのためにはどうあらねばならないかを議論していただくとしたものである。

相互理解と具体的な改善提言につなげるために、本年の企画として特に留意したのは以下の点である。

- 1) 事務所相互訪問（JICA参加者はNGO事務所を、NGO参加者はJICA本部を）の時間を長くし、昼食をはさんで、公式的な説明だけでなくざっくばらんな意見交換の機会も設け、一層の相互理解の場となるよう企画した。
- 2) 初日夜のパネルディスカッションは、案件発掘・形成の経験豊富な双方の関係者にお願ひし、基本的な課題、根本的な問いかけを提示して頂き、翌日の分科会議論の活性化を図った。
- 3) まとめの全体会で、一般論に拡散させるのではなく、JICA、NGOそれぞれが「すぐにでもできる、すぐにでもすべき具体的な改善提案」をアクションプランとして作成し、各人の組織等に生かせるよう企画した。

2. 成果

NGO・JICA双方4名ずつの検討委員による検討委員会を5回開催し、企画を練った。その間の議論自体が、ある点では相互研修の場ともいえ、例年の事ではあるが、相互の理念や視点、アプローチ、体制の違いや共通点を認識する好機であった。

参加者は、JICA、NGOともに海外事業現場に携わった経験者はさほど多くはなく、5分の1程度であり、案件形成の経験者は更に少なかった。これは例年同様の傾向であり、比較的若手スタッフ対象で、日本国内で実施する研修という性格上、やむを得ぬものと考えている。従って、ある程度募集条件を示すとしても、この様な層の方々が集まるという

前提で企画を立てることのほうがむしろ妥当だろうと思われる。

今回も、案件形成の経験が殆どない方と経験が比較的ある少数の参加者とがあった。経験者が分科会に分かれて入ることで、他の参加者が学ぶ機会ともなったし、分科会の議論を経験者がリードしたり矛盾やジレンマなど現実的な悩みもふまえた建前だけでない掘り下げた議論ができたようである。これらも含めて以下のような成果があった。

1) すぐにでも改善に向けて取り組めるアクションプランを作成した

従来、検討委員として関わってきて最大の悩みは、参加者個人々人への学びは大きく、また相互の個人的ネットワークも出来るという大きな成果を挙げつつも、それが JICA なり NGO なりの「組織的な条件」由来の問題解決、改善には至らないという限界であった。国際協力に関して、個人個人がいかにあるべき姿を描き出し、アプローチにおける重要配慮事項などをつかんでも、組織に反映する仕組みがなければ生かされない。

今回、企画の留意点にも書いた通り、全体の最後のセッションは、それぞれがすぐにでも取り組める改善策、取り組まねばならない改善策を議論した。特に JICA グループは、課題をかなりきちんと分析し、前例となっているやり方に関して問い直しを迫るなど、具体的でクリティカルな改善策を果敢に提案した。縛りや仕組みがあっても変更は困難と考えがちな職場にあって、少しでも出来る隙間を見つけ、取り組める事からやっという意欲と姿勢には、感動を受けるものがあった。この意欲も、研修を通して触発、活性化されたものと考えており、誠に喜ばしい限りである。

NGO からの参加者は、所属団体が異なることから抱える課題も一様ではなく、課題整理や改善策も 1 本化する難しかったようであるが、共通課題に関して、若干抽象的ではあるが、共に刺激しあって取り組もうという提案が策定された。NGO 界としての課題克服につながる事を期待している。

2) NGO・JICA の案件発掘における相違点がかなりつかめた

分科会により議論の焦点は少しずつ異なっていたが、NGO・JICA の共通点と同時に違いや特徴に関して、参加者はよく理解したと言えるだろう。

特に、NGO のアプローチは、人との出会いがきっかけである事が多いが、その事が場合によっては安易で人情的、個人的な事業となってしまう危険性も持ちつつ、一方では、本気で取り組もうという人々が地元にてスタートすることで、地元主導、本当の意味でのニーズに立脚した、持続的な取り組みにつながる可能性が高いというプラス面も認識された。ある意味では諸刃の剣ではあり、プラス面をいかに引き出してプロジェクトに立ち上げていくかが大事となるという NGO ならではの配慮点も指摘された。

JICA に関して、相手国政府との契約後でも、細かい点ではかなり現場の事情に応じて変更できる可能性を持っていることが、今回の事例からも理解された。短期間の調査時

には見えなかった現実に合わせて、実際にどの程度変更するかは、当該専門家や現地の大使館や JICA 事務所、国内支援委員会など関係者の意思次第であるようだ。ともすると、既に決まっているという捉え方がされがちであるが、「いかに修正するか」も大事なプロセスである事や、また可能であることも理解された。

3) 誰のための、何のための支援かを見失わない案件形成が大事

上記の JICA 事例でも述べたが、数年間の事業が地元ニーズに合い、また実現可能な目標設定をして行わないと全く無意味となる。つまりは、誰のための、何のための事業なのかに立ちかえって、案件を形成する事が第1である。これは改めて書くとあたりまえ過ぎる事ではあるが、とにかく、既に決まっている枠組みや契約にとらわれてしまいがちである。そうではなく、常に、誰のためなのか、この計画でその人々に本当に役立つのか、現場の現実の条件にあっているのか、などをしっかりと見定める事が、事業計画の成否を左右する最大要因であり、そこをしっかりとやっておけば、その後の実施も比較的スムーズに行う事が出来る事がわかった。初日のパネルディスカッションでの、パネリストからの問題提起も、これに関連したことであったと言えよう。

3. 今後に向けて

1) 中身の濃いパネルディスカッションは、翌日にもつなげる工夫を

本年の企画は、かなり盛り沢山で、消化不良気味の点があったかもしれない。特に初日のパネルディスカッションでは、JICA、NGO それぞれから2名のパネリストから事例とそこからの問題提起をお願いしたが、4名ともかなり経験豊富な論客でいらした事もあり、それぞれが提起された課題が非常に面白く、また重要な点を含んでいた。しかしながら、時間的制約の為、十分な議論をする時間が持てなかった。進行役の検討委員が、論点整理をしてボードに書き出した事が、翌日からの分科会での検討や議論の上で大きく参考となり、そういった論点を提起していただいた貴重なパネルディスカッションであったが、参加者自身が消化してそれら論点を引き出したというプロセスを経ることが出来なかったの、一部の参加者には不消化な感じが残ったかもしれない。また、それぞれ挙げていただいた個別の事例も、興味深いもので、それに関する質疑をもっとしたかったという思いも残っていると思う。当初企画した意図は十分果たせたものであるが、もう少し翌日にも比較検討の対象事例とするなどの活用を図ったほうが良かったかもしれない。

2) 事務所の相互訪問を更に充実

事務所の相互訪問は、例年多くの刺激や知識を得る機会となっているようである。質疑の時間が足りないこともままある。一部 NGO 参加者からはもう少し突っ込んだ議論を期待するむきもあり、今後に向けてより充実した内容にしていく必要があるが、継続して行っていきたい。

3) ワークショップ形式やアクションプランやシミュレーションを継続

分科会や全体会を通じた本研修の達成目標として、分析的に理解するだけでなく、シミュレーションやアクションプランなど改善提案づくりなど、具体的な業務に生かせるものが良いと考える。その点で、本年のようなプログラムは継続したい。

4) 今後のテーマ候補

今後取り組むテーマとしては、いろいろあり得るが、シミュレーションという方法を念頭に置いた場合、当初から意見のあった、「JICA と NGO の連携のあり方」や「連携にあたっての条件」を議論する事も候補となり得るだろう。また、最近 JICA をはじめ日本 ODA も掲げはじめた「平和構築」に関しても、実際にどんな視野で考えているのか、何が可能なのか、何をしてはいけないのか、など、紛争地域や緊急救援にも即応性の高い NGO ならではの視点や方法論を持っており、相互比較検討する課題となり得るだろう。

5) その他の要望

参加者から、東京だけでなく他地域でも実施して欲しいとの要望や、JICA だけでなく国際協力銀行や外務省職員等他の ODA 関係者も参加したらもっと相互に学習できるのではないかとの声も出ている。種々のクリヤーせねばならない条件もある事と、規模拡大でワークショップ形式での実施が困難になれば本研修ならではの成果を挙げている方法論が崩れてしまえば意味がないが、そういった機会があると良いだろうとは思う。この研修の枠で出来る事なのか、別の形で考えるのか、検討が必要だろう。

例年課題として出されるのが、参加者のフォローアップや卒業者コースの新設である。今回のアクションプランがどう実行されたのか、是非とも知りたいところである。また何らかのサポートの仕組みも考えた方が良くかもしれない。

最後にあたり、本研修がこれだけの成果を挙げられたのも、まずもって事例報告者の虚心に立った説明のたまものである。いわば、まな板の鯉状態であり、認識違いや否定的な発言等失礼の段、いろいろあったと思われるが、率直に現実をご紹介下さり、また建前、きれい事だけではすまない点や条件の指摘なども出してくださった事で、頭でっかちでない議論が出来たと考える。長時間お付き合いくださった労に深謝したい。また、貴重な問題提起を下ったパネリストの方々も、忙しい時間を縫って刺激的な発言をご準備下さった事に感謝申し上げたい。事務方をしてくださった、国際協力総合研修所の方々、国際交流サービス協会の方々、場所をご提供下さった横浜国際センターの献身的な作業によって支えられていたことを申し添えたい。

以上

研修の概要

1. 研修の目的

(1) 国際協力を実施する上でのパートナーとしての NGO と JICA 双方についての理解促進と、国際協力に関する認識を共有すること。

(2) 将来の連携に向けた人的ネットワークの形成と情報交換の場を提供すること

(3) 上記(1)、(2)を通じ、NGO 及び JICA 双方の若手及び中堅職員の人材育成に寄与すること。

2. 研修テーマ

「プロジェクト案件形成」(～プロジェクトは誰のため、何のため～)をテーマに NGO、JICA それぞれのプロジェクトを研修材料として取り上げ、案件形成(案件発掘/立案)を行う際の基本的な考え方や留意点について、各参加者の経験とノウハウを持ち寄っての相互学習を行う。

今回研修材料として取り上げたプロジェクトは、NGO 側の案件として日本国際ボランティアセンターの「持続可能な農業と農村開発(SARD)プロジェクト」、JICA の案件として「インドネシア淡水養殖振興計画」の二案件であった。分科会では、参加者を4グループに分け、それぞれどちらかの案件を取り上げ、案件形成を行う際の考え方、留意点等の理解を深めた。

3. 主催

国際協力事業団、(特活)国際協力 NGO センター

4. 研修期間

2002年10月17日(木)から10月19日(土)

※2泊3日の合宿形式で実施。

5. 研修場所・宿泊場所

国際協力事業団 横浜国際センター (所在地:横浜市中区新港2-3-1)

6. 研修経費

研修にかかる経費(教材費、横浜国際センターの宿泊費等)は全て国際協力事業団が負担。研修参加に要する交通費は、東京近郊以外に居住する人についてのみ事業団の規定により支給。

7. 研修実施体制

(1) コースリーダーの下に、NGO 諸団体及び国際協力事業団双方の代表によって構成される検討委員会を設置し、研修内容、実施運営について協議の上、決定した。

(2) 国際協力総合研修所及び国際協力 NGO センターに事務局を置き、研修実施に当たっては、運営の一部を（社）国際交流サービス協会に委託して実施した。

2002年度 NGO-JICA 相互研修日程表

10月17日(木)

時間	NGOスタッフ	時間	JICAスタッフ
11:00	集合、受付 事務所相互訪問 (JICA本部 11AB)	9:30~ 10:00	集合、受付 (JICA本部 11AB) 事務連絡
		10:00~ 11:00	訪問先事務所へ移動
11:20~ 12:30	JICA事業概要について	11:00~ 13:30	事務所相互訪問 (シャプラニール又は 日本国際ボランティアセンター) 団体事業説明と意見交換会 (昼食含 む)
12:30~ 13:30	意見交換会 (昼食含む)		
13:30~ 14:50	国内連携事業について	13:30~ 14:30	国際協力NGOセンターへ移動
15:00~ 16:00	国別事業実施計画と案件形成について	14:30~ 16:00	NGOのプロジェクト運営・支援体制と 国際協力活動の現状
横浜国際センターへ移動			

17:30~ 17:40	開講式 (主催者挨拶)	オリエンテーション ルーム 「いちよう」
17:40~ 18:00	オリエンテーション	
17:40~ 18:00	アイスブレイキング	
18:00~ 19:00	夕食	
19:00~ 21:00	パネル討議	オリエンテーション ルーム 「いちよう」
~全員宿泊~		

10月18日(金)

9:15	集合	
9:20~ 9:30	事務連絡	オリエンテーション ルーム 「いちよう」
9:30~ 12:30	事例報告 1 持続可能な農業と農村開発 (SARD) プロジェクト (NGO案件) 2 インドネシア淡水養殖振興計画 (JICA案件)	オリエンテーション ルーム 「いちよう」
14:00~ 17:00	ワークショップI (4グループに分かれて事例を題材に双方の案件発掘形成の特徴を分 析し、相互の課題を議論)	セミナールーム 3,4,8,10
17:00~ 19:00	意見交換会	オリエンテーション ルーム 「いちよう」
19:00~ 21:00	ワークショップII (ワークショップIに続き、ディスカッション、全体会での発表準備)	セミナールーム 3,4,8,10
~全員宿泊~		

10月19日(土)

9:30~ 12:00	全体会 (ワークショップの結果報告)	オリエンテーション ルーム 「いちよう」
13:00~ 15:30	全体会 (全体討論、総括)	
15:30~ 16:00	閉会 (主催者挨拶、アンケート記入等)	
~解散~		

2002 年度 NGO-JICA 相互研修日程表
講師・ファシリテーター一覧

○講師

10月17日(木) (NGOスタッフ)

項目	所属・氏名
JICA事業概要について	JICA企画・評価部企画課 課長代理 三角幸子
国内連携事業について	JICA国内事業部連携促進課 課長代理 竹内智子
国別事業実施計画と案件形成について	JICAアジア第1部計画課 課長代理 本田恵理

(JICAスタッフ)

項目	所属・氏名
NGOのプロジェクト運営・支援体制と国際協力活動の現状	国際協力NGOセンター 事務局長 山崎唯司
NGO事務所訪問	シャプラニール=市民による海外協力の会 日本国際ボランティアセンター (JVC)

項目	所属・氏名
主催者挨拶	国際協力NGOセンター 常務理事 伊藤道雄 国際協力総合研修所 次長 村田晃
アイスブレイキング	ラオスの子供に絵本を送る会 代表 チャンタソン・インタヴォン
パネル討議	司会進行： シャプラニール評議員 長畑誠 パネラー： JICA国際協力専門員 赤松志朗 元JICA専門家 小川正子 前シャプラニール事務局長 下沢嶽 セーブ・ザ・チルドレンジャパン スペシャルアドバイザー 鶴田厚子

10月18日(金)

項目	所属・氏名
事例報告1 持続可能な農業と農村開発(SARD)プロジェクト	日本国際ボランティアセンター (JVC) 事務局長 清水俊弘
事例報告2 インドネシア淡水養殖振興計画	同プロジェクト元専門家 飯沼光生

○全体進行・総括(オリエンテーション、全体会総括、他)

日本国際ボランティアセンター副代表理事/女子栄養大学助教授 磯田厚子

○ファシリテーター

シェア=国際保健協力市民の会 東ティモール事業担当	青木美由紀
ヒマラヤ保全協会 事務局長	田中博
ラオスの子供に絵本を送る会 代表	チャンタソン・インタヴォン
シャプラニール評議員	長畑誠
JICA 国際協力総合研修所人材養成 課長	斉藤祐巳
JICA 国内事業部国内連携促進課 課長代理	竹内智子
JICA 中南米部計画課 課長代理	上島篤志
JICA 森林・自然環境協力部水産環境協力課 課長代理	西本玲

○司会

JICA 国際協力総合研修所 人材養成課 田村豪

NGO-JICA相互研修参加者リスト

No.	参加者氏名	所 属
1	相川 政夫	特定非営利活動法人ラブグリーン ジャパン
2	赤星 小百合	TICO徳島で国際協力を考える会
3	新井 綾香	特定非営利活動法人難民を助ける会
4	伊吾田 善行	地球市民の会かながわ
5	衣斐 友美	JICA総務部
6	岩崎 昭宏	JICA大阪国際センター
7	内山 貴之	JICA医療協力部
8	江崎 千絵	JICA九州国際センター
9	大杉 健一	JICA筑波国際センター
10	岡野 香苗	JICA医療協力部
11	加藤 有紀	JICA九州国際センター
12	木村 聡	JICA調達部
13	木村 信夫	特定非営利活動法人ブリッジエーシアジャパン
14	小松 豊明	特定非営利活動法人シャプ ラニール=市民による海外協力の会
15	小森 剛	JICAアジア第一部
16	佐野 千穂	財団法人家族計画国際協力財団(ジョイセフ)
17	芝山 真穂実	JICA国内事業部
18	首藤 めぐみ	JICAアジア第二部
19	末吉 和弘	特定非営利活動法人NICE(ナイス=日本国際ワークキャンプセンター)
20	谷合 正明	特定非営利活動法人アムダ
21	寺西 澄子	特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター
22	永石 雅史	JICA国内事業部
23	納堂 邦弘	財団法人PHD協会
24	野口 瑞恵	特定非営利活動法人地球の友と歩む会
25	堀田 憲司	特定非営利活動法人砂漠植林ボランティア協会
26	堀江 由美子	社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
27	三牧 純子	JICA 青年海外協力隊事務局
28	矢向 禎人	JICAアジア第一部
29	安本 智子	特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会
30	若杉 裕司	JICA 青年海外協力隊事務局
31	渡部 はなこ	JICA国内事業部
32	渡辺 正幸	特定非営利活動法人国際理解教育センター(ERIC)

NGO-JICA 相互研修アンケート集計結果

(参加者)

1. 研修に関してご自身で当初設定した目標を達成することが出来ましたか？

- 十分できた…………… 7名
- できた…………… 19名
- どちらともいえない…… 1名
- あまりできなかった…… 1名
- できなかった…………… 0名
- 回答なし…………… 4名

ご自身が得られたと思われる成果について具体的にご記入ください。

(NGO 参加者)

- NGO と JICA の立案形成の違いは、そもそも団体としての性質の違いにあるのだとわかった。
- NGO 側、JICA 側とも、今後の活動にも活かされるネットワークを作ることができた。
- これまでよく理解していなかった JICA の案件形成とその課題についてよく理解できた。
- NGO の強み・役割・使命に係わる新たな気づきを得ることができた。
- 他の NGO、JICA のことに対して理解を深められた。(用語の使い方から具体的事例、意見交換を通して問題意識を共有したことなど)
- NGO の強みや役割を再認識した。
- 普段聞くことのできない参加者の声を聞くことができ、参考になった。
- JICA の実態、スタッフの問題意識を知ることができた。
- NGO スタッフと JICA スタッフ、それぞれのネットワーク形成に役立った。
- JICA を少し知ることができた。
- JICA・NGO 双方の案件形成のスタイルの相違点(特徴)を知ることができた。
- JICA の方々の思いが伝わった。
- いくつかの気づき: ex. 「わたし」だけやる必要のないこと、あるいはその危険性。「彼ら」の専門性に頼っていい、頼るべきことなど。
- 活動の広がりへ: ex. ネットワーク、パートナーシップの可能性。活動のネクストステップ、余地などのヒント。
- JICA におけるプロジェクトの流れと問題点について知ることができた。
- NGO における案件形成の特徴の強み、弱みについて整理することができた。
- 現状のプロジェクトの再点検をする視点を得ることができた。
- NGO、JICA の人々と知り合うことができた。
- プロジェクト案件形成のみならず、JICA 全般について理解が深まった。また他団体、JICA、ファシリテーター、講師の方々との建設的な議論ができたことで、テーマに対する多様な視点を得ることができた。
- 人的ネットワークが広がり、今後の活動に幅が持てた。

- 今後の案件形成に関わっていく上で、個人／団体が持つべき姿勢や具体的な注意点、アクションプランについて時間をかけて考えることができた。
- 帰ってすぐにでも他のスタッフと共有、今後活かしていく予定です。
- JICAのシステムを理解でき、またJICAスタッフ一人一人がそれに対し問題意識をもち、改善していこうという意志があることが分かった。→NGOとJICAが歩み寄る兆しが見えた。
- 今まさに自分自身が必要としている具体的な手法や考慮すべき点が双方から出て、勉強出来た点がよかったです。また、普段から知ってはいるのに謎だったJICAが少しわかりました。何より、様々な方と接することができたのが一番よかったところでした。
- 普段意識していなかったNGOの強みを認識することができた。
- 今後の活動へのさらなる意欲につながった。
- 自分自身の（個人的な）課題が見つかった。
- JICA職員の方々からNGOの印象を聞いたところ、数年前と違い個人のかかわりもあり、良好なものであり驚いた。今後は機会があったら共通の場で（現場で）共同の作業があったら、と夢を持つことができたことは収穫なのでしょう。
- JICA、NGO双方のプロジェクト発掘、立案時の生じる問題点をともに学び共有できたこと。
- JICAのプログラムをチェックすることで、自分のやっているプログラムを再検討する気づきを与えてもらった。
- 自分が所属する組織の課題を、他団体と相談して捉えることができた。
- 人的ネットワークが広がった。
- 案件立案についてのNGOとJICAの違い、また強みと弱みを分析することにより、“NGO”という広い視野で案件立案について考えることができた。今後、どのようにNGOの強みをいかして案件立案できるのか、今後の案件立案にいかしていきたいと思います。

（JICA参加者）

- NGO案件がどのようにして形成されているのか、JICA案件との案件形成の際の違いについて、パネル討議、事例報告を通して理解することができた。パネル討議、事例報告で説明されたNGO、JICA案件を知ることは、非常に勉強になったと考える。
- そもそも案件形成が「何のためか、だれのためか」を改めて考え、JICAの事業の案件形成を具体的にどのように改善していくべきかを考えることができた。
- NGOの案件形成の特徴や強みを、スタッフの方たちの実体験を元に知ることができた。
- NGOスタッフの方たちとの人脈ができた。
- JICA職員間でも問題意識の共有ができた。
- 業務への反映として考えていた開発パートナーへの意見を伺うことができました。意外や、精算の大変さよりも管理費や人件費がきちんと出るメリットを強調され嬉しい誤算でした。
- 第一にNGOという団体がどういうものなのか、ずっと疑問に思ってたことが少し明らかになってきたこと。そして第二に（これが今回の大きな収穫）案件形成というものの難しさ、そして何に留意すべきなのかということが学べた。
- NGOとJICAの強み、弱みを知ることができた。今後の案件形成において双方の強みを活

させるように留意したい。

- 計画的でありながら柔軟に取り組んでゆくという姿勢。
- NGO に対する理解が深まったこと (NGO といえども千差万別であり、その中で働く人々も多様であり、「この NGO スタッフはこう」という様にひとくくりにはできないこと)。
- NGO のプロジェクト形成過程、実施方法などについての理解を深めることができた。またワークショップを通じて、JICA の問題点を具体的に認識することができた。JICA と NGO の類似点・相違点を考える非常に良い機会だった。
- 案件発掘・形成の段階での留意点について、今回中心的な課題だった点をワークショップの場でも随分議論できたので、修得した知見が多かった。
- 事業実施にあたり、疑問に思っていた点が、今回の研修を通じて理解することができた。特に計画に対する NGO 側の考え方を知れたことは大きかった。
- 各 NGO 固有の問題点などを聞く。
- JICA への印象を聞く。
- NGO での案件形成と JICA のそれとの違いの把握。
- 今まであいまいなイメージしか持っていなかった NGO の活動 (NGO の方々も) について良く理解でき、双方の良い点、改善点を一緒に認識し話し合うことができた。また JICA の問題点や事業についても勉強できた。
- いろいろな NGO の人たちと率直に話し合えたことと案件・発掘・形成についても理解が深まったことで、一定の成果があったと思う。ただそれは十分ではないので、これを機会にますます努力していきたい。
- JICA と NGO の違いを実感し認識する事ができた。
- NGO の考え方を感ずることができた。
- 様々な NGO・JICA スタッフと顔をつきあわせた付き合いができたこと。
- プロジェクト形成時に注意すべき点を洗い出すことができたことは将来かかわるであろう身には良い勉強になった。
- あらゆる視点で国際協力を見ていきたいと思う。
- 活動とプロジェクトの認識・実態の違いを知った。
- 案件形成のはじまり。
- JICA ができること、JICA しかできないことの認識の確立の必要性 (強み、弱み)
- NGO と JICA の案件形成の視点の違いを学ぶことができた。またそれぞれに強み・弱みがあり、お互い学び補充できると感じた。
- NGO の方々との人脈が広がった。具体的に国内研修事業で連携できそうな団体の方と知り合えた。
- ワークショップを通じて、それぞれの考え、思想を知ることができた。

2. 研修中特に印象に残った点や良かったと思われるプログラムについてご記入下さい。

(NGO 参加者)

- ワークショップ。
- 研修中のプログラムでも、またそれ以外で、参加者とざっくばらんに腹を割って話し合える機会、時間があつたことが良かった。

- JICA 側参加者の問題意識の高さ、状況改善への意欲に大変刺激と感銘を受けた。
- パネリスト、事例報告者など豪華な顔ぶれで、ひとつの研修に参加するだけで、これだけ様々な方の話を聞くことができたのは有益だった。
- ワークショップも話を深める場として充実していたが、もっと自分に引きつけられたらと思った。
- 双方スタッフのワークショップ←相互理解が深まった。
- JICA だけでなく NGO 間のネットワークができた。
- すべてのプログラムが勉強になりました。
- JICA の抱える問題、JICA の苦勞を感じた。
- NGO-JICA 一緒に検討して、一緒に飲み食いしたこと。相違点、共通点が見えた。
- 2 日目の WS に明確なプログラムがなかったことは良かったのか？わるかったのか？
- JICA 職員の方々の問題意識の高さに驚かされました。
- 本当に JICA が変わろうとしているのだなあと感じられた。
- このような研修に参加するのは初めてであったので、様々な手法など新鮮だった。
- 元シャプラ下澤氏のまとめでおっしゃった言葉。
- JICA のスタッフとかなり腹を割った話ができグループディスカッション。
- やはり JICA・NGO スタッフが混在するグループによるワークショップが、一番学びが大きかったです。
- 最後のセッション……NGO・JICA それぞれにわかれて互いの認識の問題点。更には改善点を出し合ったこと。
- ただ話を受けるだけでなく、実際に話し合っ、みんなの考えを知ることができたプログラムが良かったです。
- JICA の皆さんの問題意識。今後の良い方向に進んでいくと思った。
- プログラムも有意義だったが、休憩時間、終了後の交流。
- JICA 内部より改革を指摘しており、数年後を期待したい。
- ある程度ポイントをしばっての討議は良かった。時間をさほど気にしないので議論は良かった。
- JICA、NGO 双方のプロジェクト発掘、立案時に生じる問題点をともに学び共有できたこと。JICA のプログラムをチェックすることで、自分のやっているプログラムを再検討する気付きを与えてもらった。
- 19 日午後のプログラムは良かったが、時間が短く、掘り下げができなかったのが残念。
- JICA のシステムはともかく、JICA の職員の方々が非常に柔軟である、という印象があります。
- 1 日目の夜のパネルディスカッションは、より多くの事例を知るという意味でよかったと思います。

(JICA 参加者)

- ワークショップ I・II を通じて、率直な意見を交換できた。自由に意見を言える雰囲気があり、とてもありがたかった。
- 事例報告がとても詳細で現場での苦勞や模索、思いなどを感じとることができた。
- NGO と JICA という異なったプロジェクト形成をしてきた人達が、案件形成について深く

- 話し合うというのは、いろいろな意見がでてきて興味深かった。また NGO の人たちと直接コミュニケーションがとれ、多くの意義のある情報が得られたのも収穫であった。
- 8名というグループ編成。またじっくり進めていただいたファシリテーターの方の姿勢。これにより、自由なテーマに基づき様々な意見交換を行うことができたと思います。8名という人数は意見が少なすぎず、またまとめきれない程バラエティでなく、非常に良い単位だと思いました。
 - やはりグループ別のワークショップが印象に残ったし、有意義だった。
 - NGO と JICA の合同作業。(お互いの「思いこみ」に気づく等、発見の連続であった。ディスカッションを通じて NGO の方々を身近に感じた。)
 - NGO の方々との合同ワークショップは大変楽しく、また勉強になった。
 - その他、公式プログラム終了後の非公式な意見交換会は、NGO の方々と親しくなるといういい機会だった。
 - ワークショップと全体会。
 - ワークショップの最終で、JICA・NGO 別にしたのは今回 JICA 職員としては成功と思えた。
 - 具体的なアクションプランを詰めて考えられた。(一方 NGO 側はどうだっただろうか)
 - ワークショップを通じて、NGO・JICA 双方の考え方や見解を議論できたことは良かったです。
 - NGO の活動のためにファンディングなど活動がしばられ、思ったような活動ができないことがある点。
 - 案件の進め方など意外と似ている点。
 - 1日目の NGO 訪問と JICA 訪問。普段はまず行けないところなので貴重なお話を聞いた。
 - グループ毎のワークショップ。(これにつきます)
 - 柔軟性のあるワークショップ。
 - NGO・JICA 双方の率直さ。
 - ワークショップ(とにかく集中して時間が取れたことが良かった)
 - JVC 事務所訪問(実際にいくことでその規模が実感できた)
 - 全員名札を着用し、自己紹介を全員でやる時間を省いたこと。(積極的に話にいかないといけない気が強まる)
 - JICA、NGO 一緒に宿泊していること。
 - NGO or JICA のプロジェクト分析の前に、いくつか事例を知ったこと。& NGO の訪問。
 - 全ての NGO は問題意識が活動の起源。
 - NGO の案件形成には「出会い」が大きな役割を果たしている。
 - 「プロジェクト」という言葉一つとっても、NGO と JICA で思い浮かぶイメージが異なる。
 - NGO と JICA が意外と似ていたのが驚きでした。それがお互いの良さや強みを殺していないことを願うばかりですが、お互いの学び合いの場として、一緒にプロジェクト分析などできたのは非常に良かった。
 - ワークショップ I・II
 - 共同作業を通じて連帯意識がもてた。
 - まとめ上げる過程でのディスカッションが意義深かった。

3. 今後に向けての改善要望事項等があればお書き下さい。

(NGO 参加者)

- 検討委員らの発言は、なるべく少ない方が良かった。
- 提案であったように、外務省の方も交えた研修ができると良い。
- NGO-JICA の連携についても、具体的に話し合える場があると良かった。
- 人数が多め？木・金と平日がつぶれるのはいたい。(週はじめの月曜日が祝日だったのも大きい)。日曜日の午前迄などの日程はどうか。
- 外務省、JBIC も入れて。
- 20 名くらいが良いかな。
- 夕食は多すぎた。
- NGO・JICA 相部屋を提案します。
- JICA 本部での講義をもっとおもしろいものにしてほしい。
- 事務連絡を事前に。(食事や日程など)
- やっぱりアクションプランをもっともっとかみくだいて、充実させたものにしたかった。
2 日目の WS の時間を短縮すれば(プログラム・検討の枠組みがあれば可能?)、アクションプラン作りに時間がかけられたかな?
- あと、もう少しベーシックな「方法・ノウハウ」についての説明があってもよかったかな?
- 初日の JICA についての講義が単調。参加型にするなど工夫がほしい。
- アイスブレイキングが足りず(なく)、全員との関わりを持つことが難しくなった。
- 食費、交通費 etc の自己負担分を事前に教えてほしい。
- ファシリテーターの方の提案により、「前半の学び」の共有をアイスブレイクで行いました。当会の研修でよく行うのですが、毎夜 reflection の時間をとり、「今日の学び」を共有します。他の学びから新たな学びや気づきが生まれることが多いです。是非、今後も学びの共有をする時間をとれると良いかと思います。
- 最初のアイスブレイキングにもう少し時間をかけてほしかった。
- どのように改善していけば良いかという最後のまとめの話し合いの時間が一番大事だったと思います。
- もう少し時間があれば良かった。
- JICA 説明に一日のところを半日にできなかつたでしょうか。
- NGO・JICA それぞれのプロジェクトをチームごとで分析したが、時間がなく、比較する時間が十分になかった。
- こうした形式は日常的なことではなく、よかったと思う。
- ぜひ外務省、JICA、NGO 研修をやりましょう!
- 初日の JICA 訪問
JICA のプロジェクトの案件開始～終了の標準的な流れや体制、PMD 等の手法について説明があれば、後の検討の理解に役立ったと思う。
- 初日の JICA 事務所訪問のテーマが絞られていなかったのも、案件立案のテーマに絞った話が聞けるとよりよくなると思います。
- ファシリテーターの役割が、うちのグループでは明確でなかった。

(JICA 参加者)

- 最終日の討議にもっと時間をかけたかった。
- ワークショップのファシリテーターの方には、自らの意見を言うよりはメンバーの意見を引き出すファシリテーションにもう少し意識を向けてほしかった。
- 討議時間を考えれば、この様な日程設定はやむを得ないものと思いますが、もしも可能であれば昼食と夕食時間はフリーに、1.5～2時間確保していただききたいと思います。
- もう少し時間に余裕があるといいと思った。
- NGOの方とお話できる機会は限られているので、できれば初日に合同の行事をもりこんでいただいた方が、より早く打ちとけることができるのではないか。(初日は雰囲気は固く、打ちとけているムードがあまりなかった。)
- 外務省スタッフの参加。
- 現地で研修(NGO、JICA サイト)
- 初日は移動が多く、時間割が少しタイトだったように思います。
- 初日のアイスブレイキングの時間をもっと長くし、パネルディスカッションの方も消化不良にならないような工夫がほしい。(もちろんコーディネーターの方のまとめ方で9つのポイントをここから抽出してもらったのは良かった。)
- あえて言えば、初日の日程が少しきつかった(特に移動時間)。
- 事務所訪問前にお互いの顔合わせができた方がよいのでは。
- 1日目の夜に意見交換会(夕食)があれば、早くからNGOの方達と知り合いになれたと思います。または開所式での座り方をグループ毎にするなど。
- 形にとらわれた(最後の)あいさつは、できればやめてほしかった。
- NGO-JICA-外務省の相互研修
- 各省、JICA、NGOの相互研修
- 平日2日、休日1日ではなく、平日1日、休日2日がよい。
- ワークショップでのファシリテーターの役割の再検討
- JICAスキームの更なる詳しい説明をNGOスタッフにしておく。
- 地方での開催を是非検討してください。
- またはもっと地方のNGOが出られるようなアフターマティブアクションをするべきだと思います。
- NGOとJICA共通課題である国内の支持基盤の強化について、話し合う時間を設けたらどうか。
- ある問題について、NGO-JICAの合同プロジェクト作りをしてはどうか。(お互いの強みを生かして)
- 全体アイスブレイキングの時間はもっと取って下さい。
- ワークショップの題材(対象案件)は事前希望をとって選べるようにすべき。
- 「パネル討議」は、実際には一方的な「事例報告」に近かった。
- 検討委員からの発言、コメントが多すぎた。
- 事例報告の題材について。今回の事例報告では、NGO、JICAとの所謂「on-going」案件を題材にしていた。JICAの事例はインドネシア淡水養殖振興計画であったが、「案件形成」という視点でこの案件が俎上にのぼり、長所、短所をコメントされ、「こうあるべきだった」と言われても、それを盛り込むことができるわけでもなく、であれば、わざ

わざ「on-going」の案件を事例にする必要があるのだろうかと考える次第です。

- 参加対象者の絞り込みが必要。研修の対象者は JICA 職員の場合、2～10 年の経験を有することになっているが、「案件形成」というテーマを考えた場合、これまでの「住民参加」や「評価」というテーマと違い、事業部でのプロジェクト担当の経験や在外事務所での経験に大きく左右される。従って、ワークショップを十分に行ってその経験不足の部分を補うということも十分に理解できるが、既に双方を経験した職員においては非常に冗長な感が否めず、もっと深い議論を行い、最終的には、現在の NGO、JICA の与えられたキャパシティ、システムの中で、何が出来るかを具体的に考えることが重要だったのではと考える次第です。
- 研修の進め方。パネル討議、事例報告という形態は特段問題ないが、1 日以上（スケジュール的には 1 日だが、作業等で深夜まで行ったグループもある）のワークショップの必要性については疑問を感じる。というのは、研修の進め方として、NGO、JICA 案件（事例）をレビューする→それぞれの長・短所を検討する→「案件形成」とは、一般的にどうあるべきかを考える→最終的には、現在の NGO、JICA の与えられたキャパシティ、システムの中で、何が出来るかを具体的に考える、ということを目指していたが、今回の研修では最後まで踏み込めなかったと考えます。これはあまりにもワークショップに時間を割いていたことと、前述の通り NGO、JICA の参加レベルにバラツキがあったことが一因と考えます。折角、NGO と JICA の職員が一緒に研修し、また、NGO からもかなり経験を持った方が講師、事例報告者として参加してもらっている訳ですから、単に NGO、JICA 双方に共通認識を与えること等に留まらず、もう少し踏み込んだ議論をすべきと考える次第です。

4. その他感想、ご意見等があればお書き下さい。

(NGO 参加者)

- JICA、NGO を分析してきた上で、円借款をしている JBIC が何をやっているかを疑問に思った。
- 楽しく、有意義な研修でした。どうもありがとうございました。(2)
- JICA の案件形成の問題点や ODA 批判についていろいろと JICA-NGO 双方から出たが、もっと JICA 側から NGO に対する疑問点や批判や提案なども聞きたかった。
- 事務局、検討委員の皆様、ありがとうございました。(2)
- 本当に良い経験になりました。今後の活動に十分生かせると思います。今後もこのような研修がありましたら、絶対参加します。次は NGO、JICA で共に何が出来るかについてをやりたいです。
- 今後もよりよい研修を目指して行ってください。
- 相互研修と少しずれますが、ドキュメンテーションの強化、NGO 間の情報・経験共有という話がでていましたが、JICA の HP のように JANIC のとりまとめで、様々な NGO のドキュメントをダウンロードできるシステム作りはいかがでしょう？総会資料、プロジェクト報告書、カウンターパート選定ガイドライン、ケーススタディー、Exit strategy、TOR など。ボトムアップの一つの手段として、効果があるような気がするのですが……。
- 全体的にととても良かったです。とても勉強になりました。

- この体験を日々の業務にいかします。ありがとうございました。
- ここでの出会いを次につなげられればと思います。
- JICA 事務局の皆さん、お疲れさまでした。
- 体調不良状態で参加し、終了時には回復してしまった。これは良好な研修であったことの印であろう。
- NGO と JICA の若手職員、志は同じだけれども異なる組織システムで働くものたちで、本音の意見交換ができてありがたかったです。このような場をご用意いただき、ありがとうございました。
- JICA、NGO の皆様に感謝申し上げます。
- とても良い経験になりました。検討委員の方々が議論した上での内容だったと思います。ありがとうございました。

(JICA 参加者)

- 密度が濃く、疲れたがとても有意義だった。
- NGO の方 (委員含め) も JICA のスタッフ (委員も) も寛容で、自由な雰囲気よかった。
- 大変面白い討議ができました。また新しい意見を伺うことができました。
- 楽しい場の設定をしていただきました委員の方々、事務局の方々、どうもありがとうございました。(2)
- とても有意義な時間がただけて感謝しています。
- 討議中に出てきた外務省を入れた研修を検討してみてください。
- 研修に携わってくださった方々、お疲れさまでした。(2)
- 非常に意義の深い、心に残る研修となりました。
- 大阪でも同じような研修ができれば良いと思います。(センター内で議論してみます。)
- 今後 NGO、JICA 連携を実践的な場に円滑にもっていくには、ここで参加した個人の行動次第だと感じた。息の長い関係を、少しずつ築いていきたい。
- とても楽しく勉強になりました。
- NGO の案件を題材にする班 (グループ) だったが、JICA の案件の方にも取り組みたかった。
- 本当に良い研修だと思います。今後も維持するとともに、実際の人事交流に発展してゆくと良いのでは？
- JICA 内での今回のような JICA プロジェクト分析、改善分析の Work Shop の開催。
- Work Shop 等を通じての、職員レベルからによる「JICA スタンスの確立&共通認識」をとるような試みも重要と思う。
- 勉強になり、刺激も多く面白かった。
- 事前の資料が出発前に届かなかった。

(研修関係者)

1. 今回の研修は所期の成果を上げることができましたと思われますか？

- 十分できた…………… 3名
- できた…………… 3名
- どちらともいえない…… 0名
- あまりできなかった…… 0名
- できなかった…………… 0名
- 回答なし…………… 2名

具体的な成果だと思われるものをご記入下さい。

- 「改善のためのアクションプラン」を話し合い、いくつか重要な具体的なプランを作ることができた。研修成果をどう生かすかの具体的なプランが見えたことになるので良かった。
- NGO/JICA 事例をもとに、その案件形成の特徴・相互の弱点を克服する提案・共通の課題の分析が、かなり出来たのではないかと考える。
- 案件形成の基本的なプロセスと留意点が共有された。
- 特に JICA の形成についての理解が進んだ。
- JICA の職員の“愛”と“冷静さ”知ることができた。
- NGO の微力さの再認識。
- NGO、JICA それぞれで具体的なアクションプランができた。
- ありきたりのガイドラインの作成に留まらず、具体的なアクションプランに落とすことができた。
- (内容はもっと時間をかけて吟味する必要があると思うが、少なくとも NGO、JICA 双方が自分達の強みを認識し、制約範囲外で何ができるかを検討できた)
- 「一旦セクターを明示して案件を作成すると、後からセクターを変えて案件を修正することは不可能、という JICA の案件形成の問題。その問題をかえる為には JICA 本部の組織をセクター別でなく地域別にする必要がある。」と認識できたこと。
- NGO の案件形成方法は、最終受益者ありきで形成することが認識できたこと。
- JICA、NGO それぞれの強みを意識した上で、今後の事業実施に向けた具体的な改善策まで導き出すことができた。
- 自分の NGO に対する理解を深めることができたことで、自分の担当する事業の見直しのきっかけとなった。
- NGO、JICA の相互理解。
- 相互比較を通じた今後のアクションプラン (案件発掘・形成)
今後の業務改善の種として、さらに詳細を議論できる場があればいいと思います。

2. 研修中特に印象に残った点や良かったと思われるプログラムについてご記入下さい。

- パネル討議の中身、各パネリストからのコメントは示唆に富んだものだった。(が、も

う沢山だったか?)

- やはり Nominication はおもしろい。
- JICA が改革していこうという意欲が感じられた。
- 私自身は JICA の案件形成のやり方のしくみがそれなりにわかってよかった。
- 分科会の中で、JICA、NGO 双方が互いに対してどのようなパーセプションを抱いているのかを知ることができた。
- 参加者の熱意 (特に A グループの皆さんの熱意には頭が下がりました。)
- ワークショップの結果発表セッションが特に良かった。
理由: 参加者の多くが発言、発表できたから。
- 2日目の分科会
- パネルディスカッション
- グループワークショップ発表
- アクションプランの発表
JICA の強みについて、さらに深く議論をして、NGO の良さとは違った JICA の良さを生かしたモデルをつくれれば良いと思います。

3. 今後に向けての改善要望事項等があればお書き下さい。

- NGO 側の参加者にももう少し案件形成や実施の経験者がほしい。
- 中・上級レベルの相互研修が必要ではないか。
- Facilitator の役割 (まとめ役、促進役、コメントなど) をもう少し強化しても良い? 参加者が盗める facilitation skill も使いようではないでしょうか。
- JVC のプレゼンは内容は良かったが、案件形成のプロセスのデータが少なかった。
→次回からベースライン情報なども含めて発表するようにする。
- JICA の国別援助計画の説明は良かったが、そのあとの案件形成のプロセスを具体的に教えてほしかった。
- 内容項目が多く、一つ一つが濃い内容なので仕方ないが、時間がおしてしまった。最後の議論の時間があまりとれなかった。しかし一週間やったからいいというわけでもないし、短い時間で精一杯やれたと思う。
- 例えば案件形成をテーマに、実際の JICA と NGO の案件では、それを実施に取り込む。このように研修のテーマ、議論が案件実施に直接フィードバックされるようにする。すると 2.5 日間もかけた研修が、単なる議論だけに終わらず、満足感・充実感が更に高まる。
- 研修の成果を JICA 内で共有できるような機会を作りたい。
- 今の形式で相互研修を是非継続していただきたいと思います。また地域別、分野別での NGO、JICA 合同の研修・ワークショップ等も併せて行うことも検討してはどうかと思います。

4. その他感想、ご意見等があればお書き下さい。

- 当初の日程と変更したことで、会場確保にお手数をおかけすることになった。横浜セン

ターという場所も悪くはなかったがと思うが、設営・コピー・資材搬送などお手数だったと思う。お疲れさまでした。

－最後のセッション、もう少し時間があればよかったですね。

－お疲れさまでした。ありがとうございました。

－JICAにくらべて日本のNGOは経験がまだ短く、もっと修行が必要である。（特に案件形成）おつかれさまでした。

－検討委員として参加させてもらい、研修の運営・企画の仕方、また研修の中ではファシリテーターとしていろいろと学ばせてもらいました。時には一参加者になり、皆さんと一緒に議論させてもらい、とても勉強になりました。

－磯田先生、検討委員の皆様お疲れさまでした。ありがとうございました。

－ファシリテーターとして青木さんの存在は大きく、大変刺激を受けました。

－様々な団体の方とフランクにお話しできる大変貴重な機会をありがとうございました。

－第一回と比べてかなり実質的な議論がいろいろできるようになってきたのではないかと思います。この輪をさらに広げていくことが必要と思います。（たとえばJBIC、外務省他 ODA 関係者に入ってもらう等）

2. 研修内容

事務所相互訪問

1. 概要

NGO、JICA 双方の相互学習・相互理解を深めるために、それぞれの組織概要や事業の進め方などのバックグラウンドを知ることがを目的として、研修最初のプログラムとして事務所相互訪問を行った。

双方のプロジェクト運営方法についての議論を行う前に、組織概要や事業の運営体制、事務所の雰囲気等を実際に肌で感じることは、その後の議論に役立ったかと思われます。

2. 訪問スケジュール

<JICA スタッフ→NGO 事務所及び国際協力 NGO センター訪問>

時間	項目	講師
9:30～ 10:00	集合、受付	
10:00～ 11:00	各事務所へ移動	
11:00～ 13:30	NGO事務所訪問	シャプラニール＝市民による海外協力の会 代表理事 大橋正明 日本国際ボランティアセンター (JVC) 事務局長 清水俊弘
13:30～ 14:30	(特活) 国際協力NGOセンターへ移動	
15:00～ 16:00	NGOのプロジェクト運営・支援体制と 国際協力活動の現状	国際協力NGOセンター (JANIC) 事務局長 山崎唯司
横浜国際センターへ移動		

<NGO スタッフ→JICA 本部訪問>

時間	項目	講師
11:00	集合、受付	
11:20～ 12:30	JICA事業概要について	JICA企画・評価部企画課 課長代理 三角幸子
13:30～ 14:50	国内連携事業について	JICA国内事業部国内連携促進課 課長代理 竹内智子
15:00～ 16:00	国別事業実施計画と案件形成について	JICAアジア第一部計画課 課長代理 本田恵理
横浜国際センターへ移動		

3. NGO 訪問報告

(特活) 日本国際ボランティアセンター (JVC)

講師：JVC 事務局長 清水 俊弘

内容：1. 団体の概要説明、設立の経緯

カンボディア難民支援を皮切りに活動を開始→難民支援の行き詰まり→カンボディア国内復興支援へ→現在、農業を主体とした農村（村落）開発を行う。

2. NGO の役割

(1) 協働 (2) 政策提言 (3) ネットワーク (4) 開発教育→(1) から (4) を円滑に進めるために JVC は合議制をとっている。

3. 質疑応答

(特活) シャプラニール=市民による海外協力の会

講師：シャプラニール代表理事 大橋 正明

内容：1. 団体の歴史

バングラデシュの独立をきっかけに支援活動を開始→バングラデシュ人グループをパートナーとして活動（80年代）→シャプラニール直営での活動（80年代後半）→最近再び直営での活動から間接的な活動（パートナーを通じた活動）に戻りつつある。

2. 海外、国内活動について

プロジェクトの発生や運営について。

3. 意見交換

(特活) 国際協力 NGO センター (JANIC) 訪問

講師：JANIC 事務局長 山崎 唯司

内容：1. 日本の NGO の概観及び JANIC の概説

JANIC の設立は 1987 年。

JANIC の会員となっている NGO のうち、国際協力に関係する NGO は約 400 団体で、ほぼ 100% 海外での活動を主とする NGO である。

NGO の財政規模の平均は 2 千万～3 千万。

2. NGO とは？

「俺がやらなきゃ誰がやる」の理念。

NGO は下請けではない！

NGO の強みは組織としての柔軟性。JICA 等政府系機関との補完関係を形成している、または、していくべき。

3. JANIC の事業について

1) NGO間のネットワーキング

2) NGOのキャパシティビルディングのための研修：経理や広報等、日本のNGOがまだまだ弱い部分を補うための研修を実施していく。

3) 情報公開：JANICでは理事会の内容を広報している。

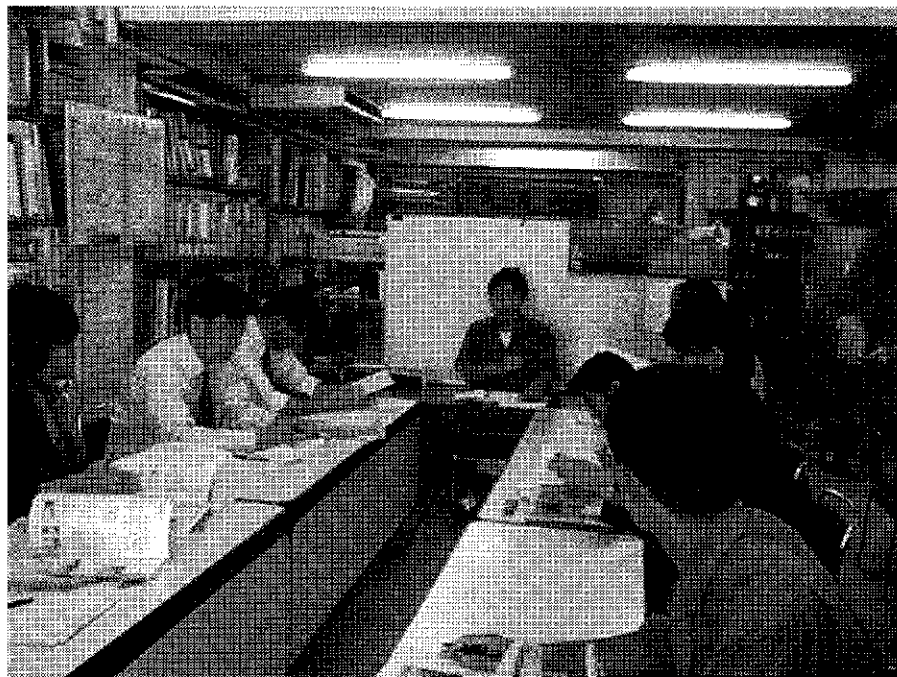
NGO一般に言えるが、情報公開を単なる義務として捉えるのではなく、戦略的に使うという思考が必要。企画・広報能力の研修を重視していく。

4. 日本の NGO の今後

現在まで団体の運営等はアメリカの NGO のまねであったが、今後は“日本”あるいは“アジア”の NGO としてのマネジメント手法を確立していく時代になっている。

<所感>

JICA 職員参加者 16 名は 2 班に分かれ、日本国際ボランティアセンター(JVC)とシャプラニールを訪問した。初めて NGO の事務所を訪問し、実際に活動している現場で活動内容や NGO としての役割の説明を聞き、NGO の意義と思い入れを理解できた。活動資金の捻出の苦労や努力の中、柔軟な活動をしていることは学ぶべきことも多かった。訪問先事務所内で NGO 職員の方々と一緒に昼食をとりながら、意見交換が行えて有意義な時間を過ごすことができた。2 箇所に分れて事務所を訪問した後、国際協力 NGO センター(JANIC)に集合し、山崎事務局長に NGO の必要性と JANIC の役割の説明を受けた。JICA と NGO の違いも理解できたが、同じ目標に向かって、どのように連携していけるかを考えさせられた。



<JVC 事務所を訪問する JICA 職員>

平成14年度NGO-JICA相互研修事務所相互訪問訪問先別リスト

訪問先 (特活)77 77-1=市民による海外協力の会 JVC:(特活)日本国際ボランティアセンター	応募者氏名	所属団体名	所属部署/担当
JVC	衣斐 友美	JICA総務部	総務課
	岩崎 昭宏	JICA大阪国際センター	業務課
	江崎 千絵	JICA九州国際センター	総務課
	岡野 香苗	JICA医療協力部	計画課
	木村 聡	JICA調達部	契約第三課
	小森 剛	JICAアジア第一部	東南アジア課
	永石 雅史	JICA国内事業部	管理課
	渡部 はなこ	JICA国内事業部	国内連携促進課
シャプラニール	内山 貴之	JICA医療協力部	計画課
	大杉 健一	JICA筑波国際センター	総務課
	加藤 有紀	JICA九州国際センター	業務課
	芝山 真穂実	JICA国内事業部	国内連携促進課
	首藤 めぐみ	JICAアジア第二部	東アジア・中央アジア課
	三牧 純子	JICA 青年海外協力隊事務局	海外第二課
	矢向 禎人	JICAアジア第一部	計画課
	若杉 裕司	JICA 青年海外協力隊事務局	海外第二課

4. JICA 事務所訪問報告

「JICA 事業概要について」

講 師：JICA 企画・評価部企画課 課長代理 三角幸子

内 容：1. 日本の ODA における位置づけ
2. JICA 組織及び事業内容
3. JICA 事業の基本枠組み
4. JICA の援助の動向 (JICA の改革に向けた取り組み)
(1)効果的・効率的な事業の実施
(2)国民理解と国民参加
(3)新しい課題への取り組み

質 疑：①開発援助の発掘から形成までの具体的な要望調査と予算の流れについて。
②独立行政法人化へ向けた改革の中で JICA の意志決定はどのように行われるのか。③独立行政法人になる狙いは、期待はなにか。

「国内連携事業について」

講 師：JICA 国内事業部国内連携促進課 課長代理 竹内智子

内 容：1. JICA の人造り協力の概要
2. NGO との連携の背景と連携の意義
3. NGO ・ JICA の連携の現状
4. 展望 (JICA の取り組み)
(1)事業実施方針、手法に関する理解の促進
(2)相互関係・信頼関係の醸成
(3)国際協力推進員の活用など

質 疑：①NGO は市民活動の成果のラベルを貼りたい。JICA も ODA の成果のラベルを貼りたい。NGO と JICA の連携、折り合いは難しいのではないのか。
②国際協力推進員は JICA の広報マンではないのか。具体的な取り組みは何か。

「国別事業実施計画と案件形成について」

講 師：JICA アジア第一部計画課 課長代理 本田理恵

内 容：1. 国別・地域別アプローチとは
2. 主要ドナーの取り組み
3. JICA における国別・地域別アプローチ
4. JICA 国別事業実施計画
(1)目的 (2)位置づけ (3)作成対象国 (4)内容 (5)活用方法

質 疑：①情報公開への取り組みとして、プロジェクト案件を公開することは具体

的にどのように活かすことになるのか。

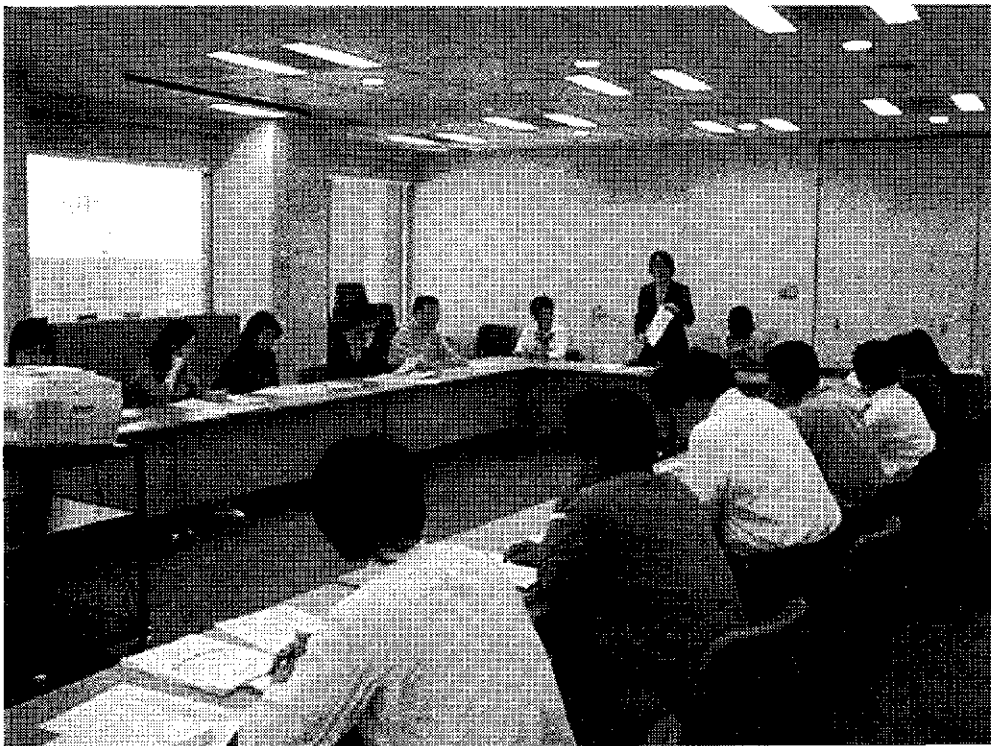
②相手国と一緒に案件を作ることは、今までとどう違うのか。

<所感>

時間制限がある中、各部担当講師の協力により講義が実施された。講師による事業概要、資料説明や質疑応答に対して、NGO 参加者も熱心に耳を傾けていた。

しかし、参加者への情報提供や理解をして貰いたい内容・課題が盛り沢山になり、参加者にとってはやや消化不良・理解不足のところが見受けられた。

ただし、講義での理解不足や疑問点などを、NGO 参加者は JICA 職員との交流・討議やワークショップを通して解消し、JICA の理念・基本方針などへの理解も一層深められたと思われる。



<JICA 本部を訪問する NGO 職員>

パネルディスカッション

テーマ：「プロジェクトは誰のため、何のため」

進行役：シャプラニール評議員 長畑誠

パネリスト：元 JICA 専門家 小川正子

JICA 国際協力専門員 赤松志朗

前シャプラニール事務局長 下沢嶽

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン スペシャルアドバイザー 鶴田厚子

要旨：

このパネルディスカッションは、具体的なプロジェクト形成の実例から「プロジェクトとは何か、誰のためなのか」について、多様な視点で考えるきっかけを提供することを目的とした。計4名のパネリストから、具体的な体験を語ってもらうことによって、翌日の分科会で事例研究をする際の様々な視点が提供された。

●エル・サルヴァドル国看護教育強化プロジェクト 小川正子

- ・調査団派遣直前に、看護学校の多くが民営化するという制度改変→カウンターパートを各学校の教員ではなく、「エ」国厚生省看護課に変更。

●インドネシア国スラウェシ貧困対策支援村落開発計画 赤松志朗

- ・中央集権国家で参加型開発を行う困難→上意下達しかしない村落開発普及員の存在。また、普及員が住民のニーズを汲み取っても中央が許可しない。
- ・日本人専門家に依存しないプロジェクト形成と運営の必要性

●バングラデシュサイクロン被災地教育環境復興事業 下沢嶽

- ・被害を受けた教育施設の修復が中心→新規の施設建設は行わない。復興後の協力まで手を広げ過ぎることなく、災害復興援助に重点を置く。

●東北タイにおける青少年事業 鶴田厚子

- ・日本人スタッフを置かず、現地スタッフのみによる運営→タイ人主体の草の根事業とする

●まとめ（分科会に向けた着眼点整理） 長畑誠

- (1) 多様な stakeholder の存在
- (2) 現地の人々の主体性をどう促すか

- (3) 日本人（専門家等）の役割
- (4) 現地政府の政策との関係
- (5) 調査の位置づけ/方法
- (6) カウンターパート
- (7) タイムスパン、フェードアウト
- (8) 緊急救援との関係
- (9) replicability



<小川氏によるプレゼンテーション>

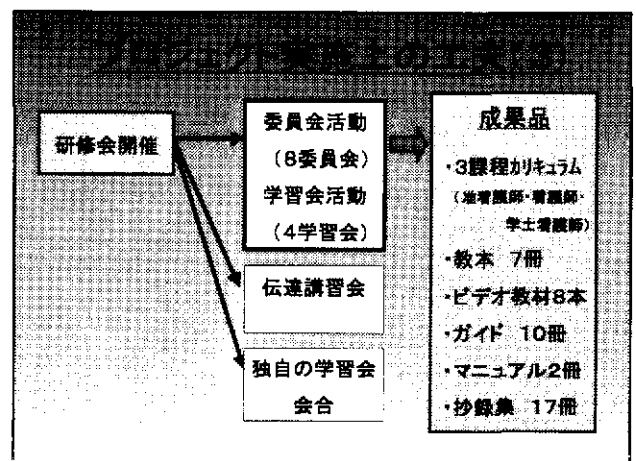
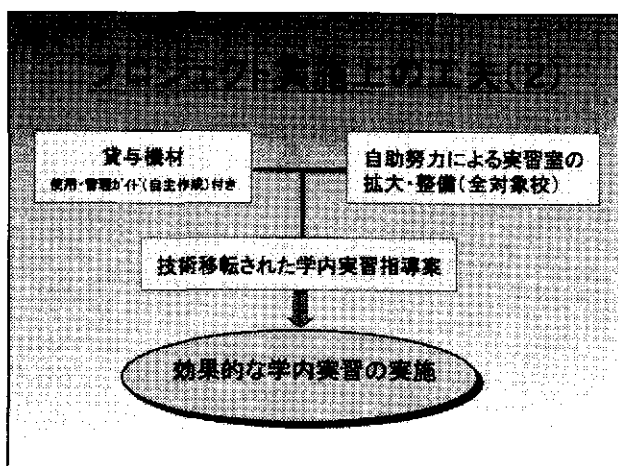
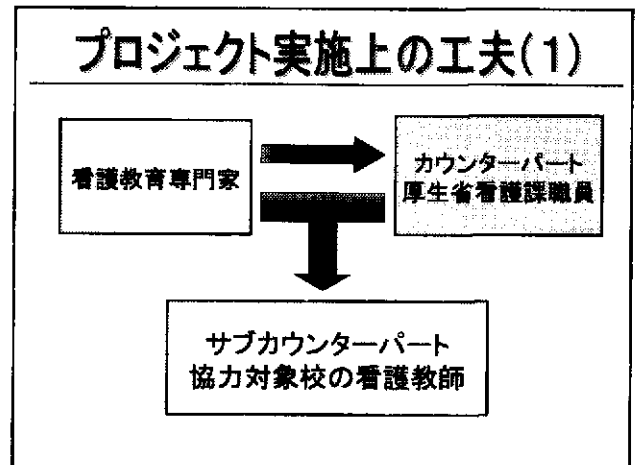
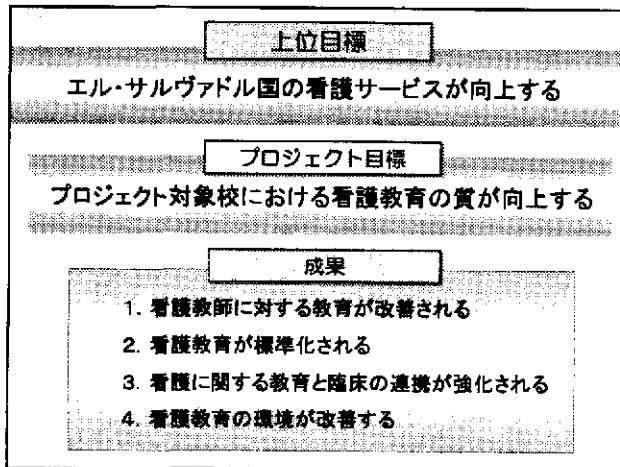
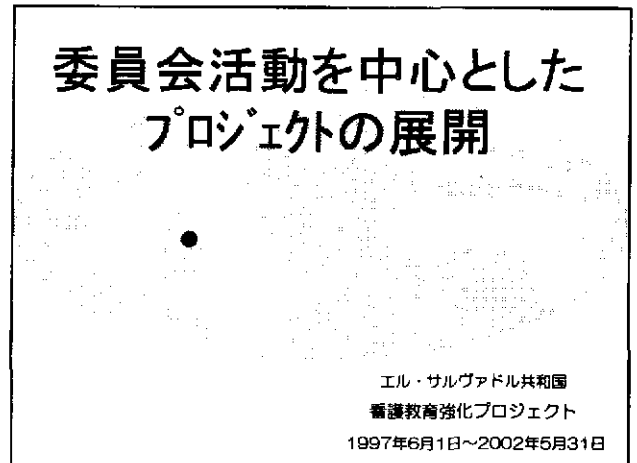
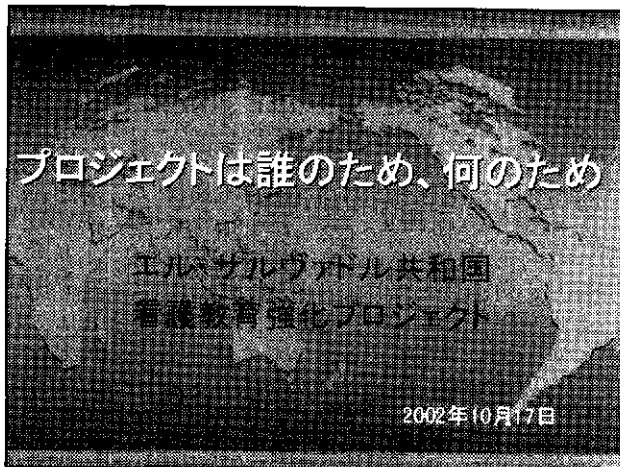


<鶴田氏によるプレゼンテーション>

2002年5月31日 現在

エル・サルヴァドル国看護教育強化プロジェクト
(Project on Strengthening of Nursing Education in El Salvador)

1. R/D等署名日： 1997年02月19日
2. 協力期間： 1997年06月01日 ~ 2002年05月31日
3. プロジェクト・サイト： サン・サルヴァドル市
4. 相手国実施機関： 厚生福祉省
5. 日本側協力機関： 厚生労働省、静岡県立大学、広島県立保健福祉大学、聖マリア学院短期大学、聖路加看護大学
6. 要請背景：
エル・サルヴァドル国は1980年から1992年まで続いた内戦のため、国家は社会経済的に疲弊したが、1992年内戦終結後、外国援助による復興計画及び逃避資金の還流により、経済的には立ち直りつつある。1994年の和平達成後初の総選挙により選出されたカルデロン大統領は、構造調整を推進するための新経済計画とともに、内戦により疲弊した経済及び社会を復旧するための社会経済開発5ヶ年計画（1994-1999）を策定した。同開発計画では保健・医療分野の対策に重点を置き、医療システムの改善、保健・医療機関の活性化及び医療従事者の養成及び適正配置を課題としてあげている。
1995年の国連統計によれば、エル・サルヴァドル国の人口は590万人、一人当りのGNPIは1,680ドルの低位中所得国であるが、内戦により保健・医療体制の整備は大きく遅れ、特に貧困層においては、妊婦、乳児の死亡率は依然高い状況にある。
このため政府は国民の保健医療に直結する看護婦及び准看護婦の人材養成を急務とし、看護人材の養成計画及びシステムの見直しと質の向上を図るべくわが国に対して、プロジェクト方式技術協力を要請した。
7. プロジェクト目標： プロジェクト対象校における看護教育の質が向上する
8. 期待される成果：
(1) 看護教師に対する教育が改善される
(2) 看護教育が標準化される
(3) 看護に関する教育と臨床の連携が強化される
(4) 看護教育の環境が改善する
(5) 自立発展のための活動が推進される
9. 協力活動内容：
(1) 看護教師に対する研修コースの実施、各プロジェクト対象校での伝達講習会の実施、教授案作成技術の移転、生涯教育の重要性に関する看護教師への啓蒙、看護教師間の協調関係の強化
(2) 看護教師に対する研修コースの実施、看護教育カリキュラムの開発、学習指導案の作成、看護教育教材の開発、看護教師の資格要件案の策定
(3) 看護実習の現状調査、教育・臨床連携強化に関する研修コースの実施、看護教育計画・実施・評価に関する医療従事者の参加システムの構築、教育・臨床連携モデルの作成
(4) 看護人材配置の状況調査、適正学生数基準に関する順守の助言、看護人材政策に関する厚生省への助言
(5) 各課題に基づいた委員会・学習会、機材の利用及び管理方法に関する研修の実施、機材の使用ガイド作成、モニタリングの実施、中米各国の看護教育機関と連携した活動を行う
10. 調査団等派遣：
事前調査 1996年03月05日 ~ 1996年03月18日 終了時評価 2002年01月02日 ~ 2002年01月17日
長期調査 1996年09月05日 ~ 1996年10月23日
実施協議 1997年02月11日 ~ 1997年02月24日
計画打合せ調査 1998年03月21日 ~ 1998年03月30日
巡回指導 2000年05月20日 ~ 2000年06月04日
- 今後派遣予定：
11. 日本側対応：
専門家派遣（長期） リーダー、業務調整、看護教育（教育カリキュラム、外科、成人看護）
（短期） 小児看護、母性看護、看護教育評価、看護教育概論、看護概論、公衆衛生看護、調査研究手法 等
研修員受け入れ 看護教育（教育カリキュラム、外科、公衆衛生、母子保健）、看護行政
機材供与 視聴覚機材、実習用マネキン、人体標本、車輛 等
その他 基盤整備事業、安全対策費、技術交換事業、啓蒙普及活動事業、セミナー対策費
12. 他の経済技術協力との関係：
13. 他機関との関係： ケロッグ財団

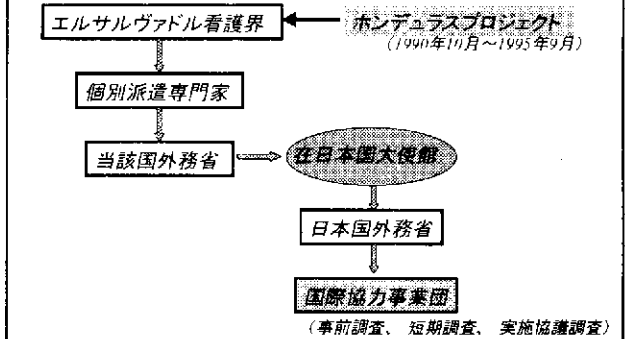


その他の主な成果

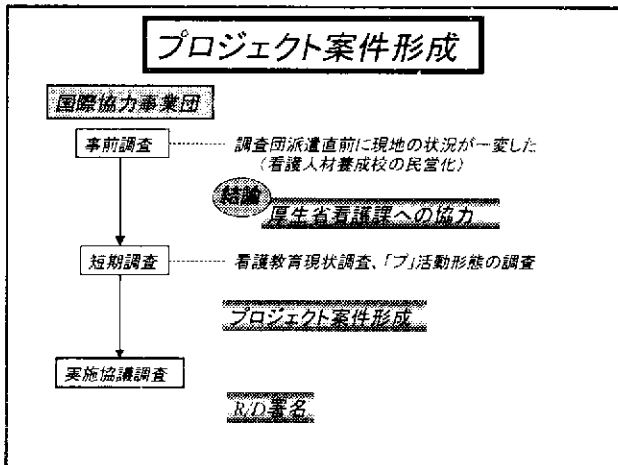
- ★社会福祉実施のための試験（厚生省認定試験）の導入により、一定の質を保った看護人材の供給を可能にすることができるようになった。
- ★国際看護フォーラムを実施し、各国より高い評価を得たことで、現地看護婦へ「やればできる」という自信と、更なる向上への動機づけができた。



プロジェクト案件形成



プロジェクト案件形成



ご清聴を感謝します



元エル・サルヴァドル
看護教育強化プロジェクト
小川 正子

インドネシアスラウェシ貧困対策支援村落開発計画(終了)

(Project on Strengthening Sulawesi Rural Community Development to Support Poverty Alleviation Programmes)

1. R/D等署名日： 1996年11月08日 2. 協力期間： 1997年03月01日 ~ 2002年02月28日
3. プロジェクト・サイト： スラウェシ島ウジュンパンダン市（ジャカルタから東へ1,400Km、飛行機で2時間10分）対象村落：タカラール県内（ウジュンパンダン市から南へ45Km）の4村
4. 相手国実施機関： 内務省村落開発総局及び南スラウェシ州村落開発庁
(PMD: Pembangunan Masyarakat Desa, Ministry of Home Affairs/Office of PMD in South Sulawesi Province)
5. 日本側協力機関： 龍谷大学、JA全中、財団法人カラモジア
6. 要請背景： インドネシアは、経済成長と政治的安定を主軸にこれまで発展を成し得てきたが、開発と経済成長が順調に進むにつれ、都市部と農村部、ジャワ島と外領（特に東部インドネシア）など国民の間に貧富の差ならびに地域格差の拡大が明らかになり始めた。同国政府は、1994年に発表した第6次国家開発五カ年計画において「人的資源の質的向上」、「経済発展と経済構造調整」とともに「平等と貧困軽減」を国家開発の中心目標に掲げ、国家的事業として本格的に貧困対策に取り組むことを明らかにした。同計画では、1993年の時点で全人口のおよそ13.7%を占めると推定される絶対的貧困層（2,590万人）を計画終了時に6%（1,200万人）まで減少させることを最重要課題の一つに挙げている。
このような背景から、東部インドネシアに位置する南スラウェシ州における貧困対策事業を含む参加型村落開発事業の立案運営力量の向上・強化を趣旨とした本プロジェクトに対し、我が国にプロジェクト方式技術協力を要請した。
7. プロジェクト目標： 上位目標：参加型社会開発モデル（タカラールモデル）が適用され普及される。
プロジェクト目標：南スラウェシ州（スラウェシ）において適用可能な参加型社会開発モデル（タカラールモデル）が開発される。
8. 期待される成果： (1) 対象村落の住民によって参加型村落開発事業が円滑に実施され、手法が開発される
(2) タカラール県で村落開発支援システムが完成される
(3) 南スラウェシ州に適したPLSD（参加型地域社会開発）研修コースが完成される
9. 協力活動内容： 1-1 支援システム事業の実施促進のための村落事業を展開する。
1-2 参加型開発に関するマニュアル/実施要領を作成する
1-3 参加型小規模生活基盤整備事業を実施する
2-1 支援システムを管理するための実施要領を作成する
2-2 支援システム事業を実施する
2-3 レビューを行い、実施要領の更新を行う
3-1 南スラウェシに適したPLSD研修モジュールを作成する
3-2 PLSD研修に関するTOTを実施する
3-3 PLSD研修を実施する
3-4 PLSD研修を実施するためのマニュアル実施要領を作成する
10. 調査団等派遣： 第1次基礎調査 1993年01月17日 ~ 1993年02月13日 計画打合せ 1998年04月08日 ~ 1998年04月18日
第2次基礎調査 1994年12月05日 ~ 1994年12月27日 運営指導 1998年11月23日 ~ 1998年11月28日
事前調査 1996年03月31日 ~ 1996年04月13日 運営指導 2000年02月28日 ~ 2000年03月08日
長期調査 1996年07月08日 ~ 1996年08月20日 巡回指導 2000年03月20日 ~ 2000年03月31日
実施協議 1996年10月29日 ~ 1996年11月08日 終了時評価 2001年08月19日 ~ 2001年09月07日
- 今後派遣予定：
11. 日本側対応： 専門家派遣（長期） チーフ・アドバイザー、業務調整員、村落開発、開発と女性、参加型開発
合計5名
（短期） 研修企画、村落開発 7名/年程度
研修員受け入れ 5名/年程度
機材供与 研修用資機材、広報記録用機材他
その他
12. 他の経済技術協力との関係： 東部地域開発政策確立・実施支援（ミニプロ：95/11-98/10）
南スラウェシ州バル県地域総合開発実施支援プロジェクト
（協力隊チーム派遣：95/1-99/12）
13. 他機関との関係： 現地NGO（環境友の会）：開発対象村落で住民のニーズのヒアリングを行う役割を担っている
ハサヌディン大学：研修モジュール開発

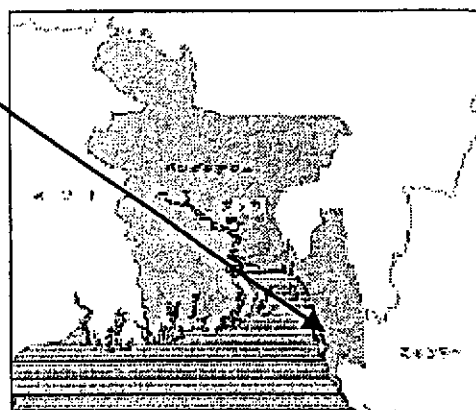
2002年度 NGO-JICA 相互研修「プロジェクト案件形成」

作成 下澤嶽 2002.10.17

プロジェクト名 バングラデシュサイクロン被災地教育環境復興事業
期間 1991年10月～1992年9月
活動地 チョコリア郡マグナマユニオン

活動の背景

1991年4月30日にバングラデシュを襲ったサイクロンは沿岸部で約13万人の死者を出す大惨事となり、生活基盤の破壊も壊滅的な状況となった。シャプラニールは被災者のための緊急救援を約3ヶ月実施したのち、復興事業を展開することとなった。様々な援助機関との調整ののち、教育的環境を整備するため小学校や高校の校舎の修復、教科書の配布などを実施することとなった。



目標とされる成果

- ・ マグナマユニオンの就学生徒の教育環境を以前の状態に復帰させ、生徒の就学率と学習意欲を以前の状況に戻す

活動内容

- (1) 教科書1800人分の配布
 - (2) 手押しポンプ13基の設置
 - (3) 学校の修復及び建設
小学校9校（修理6校 再建3校）
中学校2校（再建2校）
高等学校5校（修理2校 再建3校）
合計 16校（ユニオン内の学校9割近く）
- 予算 5400万円

課題

- ・ どのようにして教育施設の修復になったか。その調整過程
- ・ 修復か建設かをどう決めていったか
- ・ また新規学校についてはどう対応したか
- ・ 住民の参加はどうなっていたか
- ・ サイクロンシェルターを兼ねた設備としての学校建設について

以上

2002年度NGO・JICA相互研修

「プロジェクト案件形成～プロジェクトは誰のため、何のため～」、パネル用レジメ（鶴田）

1、実施事業概要

- 案件名 : 東北タイにおける青少年事業
- 活動地 : タイ国東北部（コンケン、アムナジャルン、ヤソトン県）
- 対象者 : 農村部（約100ヶ村）青少年（小学生～高校生）
- 活動分野 : 青少年問題（青少年グループ活動、教育、薬物・HIV/AIDS等）
- 活動期間 : 1992年10月～2001年3月
- 実施主体 : SCJタイ事務所、タイNGOパートナー、地域青少年グループ、地域行政機関
- 活動目的 : 東北タイにおいて子どもに関する問題に対応して活動する地域ボランティアやNGOの活動を支援しつつ、彼らが自立して事業を運営できるよう成長を助け、組織化を支える。
- 事業の背景 : 1990年代前半、タイの急速な経済発展は、都市部のスラムや農村部において多くの子どもたちを劣悪な環境に追いやった。特に貧困の厳しい東北タイにおいて青少年問題は深刻で、行き場を失った子どもたちの薬物使用など対応の困難な問題があり、学校教師などの小さなグループがボランティア的な活動を開始していた。
- 主な活動 : 1) コンケン青少年事業（Child Education Aid というプロジェクト名の65名の子どもたちとの共同生活を行う教師個人のボランティア活動支援。生活は自給自足的で、教育費はタイ国内の支援者から受ける。デイケア、貧困者

支援、農業支援など)

2) ヤソトン青少年事業 (青少年ボランティアを活用。内容は、薬物と HIV/AIDS

防止キャンペーン、薬物中毒者のリハビリ、HIV/AIDS 保護と支援など)

3) アムナジャルン青少年事業 (青少年グループ支援、職業教育、薬物・

HIV/AIDS 防止とリハビリ、障害者や貧困家庭の支援など)

2、事業調査～終了の流れの特征的側面

- ① 事業国の選定 (1992年、組織決定)
- ② 事業国事情調査 (タイのNGO調査、パートナーシップ事業決定)
- ③ 事務所設置、アクションリサーチ期間 (1992年～1993年)
- ④ 事業毎3年計画、中間評価 (タイ事務所、パートナー中心)
- ⑤ 事業フェーズアウト期間 (1998年～2001年)
- ⑥ 最終評価

3、事業成果と課題

2001年度にパートナー事業を終了し、それとともにタイ事務所を閉鎖した。タイ事業は、タイ人主体の草の根の事業としてほぼその目的を達成したと言える。格々のパートナーが財団化し、その後も活動を継続している。しかし以下のような課題が残った。

- 1) 個人レベルのコミットメントが強いという特徴があった。そのことと、事業の Replicability、団体としての Institutionalization が弱い。
- 2) 担当者間の個人的信頼関係が強い支えになる反面、担当者の相性度が悪い場合は引継ぎが困難で、排他的になりがちである。